



今切関所(新居関所)

慶長5年(1600)の関ヶ原合戦の西軍の残党を取り締まる必要から生まれたという。
 元和5年(1619)、服部正信・政重兄弟が関所奉行に就いた時から管理体制が整ったという。元禄15年(1702)に三河吉田藩に管理が移される。寛永2年(1625)関所通関規定3条が定められる。
 ・番所の前では笠、頭巾を脱がせること。
 ・乗り物の場合は戸を開かせること。
 ・大名、公家などが前もって連絡がある場合は改めに及ない。
 この規定は今切を除いて幕末まで続く、が今切は由井正雪直後の慶安5年(1652)6月に関所高札が書き換えられ鉄砲条件が追加される。(証文のない鉄砲の通過は認めない)さらに、正徳元年((1711)5月より往来(上り下り共)の女性は嚴重に証文、点検された。このことが「入鉄砲、出女」といわれた。



[弥次・喜多]
 舞阪から新居まで1里の海上。乗り合わせた蛇使いのおやじ、へびが逃げ出したという。船中大騒ぎ。喜多さん脇差で蛇を海上に放り投げるはずみに脇差も投げてしまう。竹光なので浮いてしまい船中大笑い。
 ”竹篋をすてしまひし男ぶりごつぶしとはもふいはれまい”

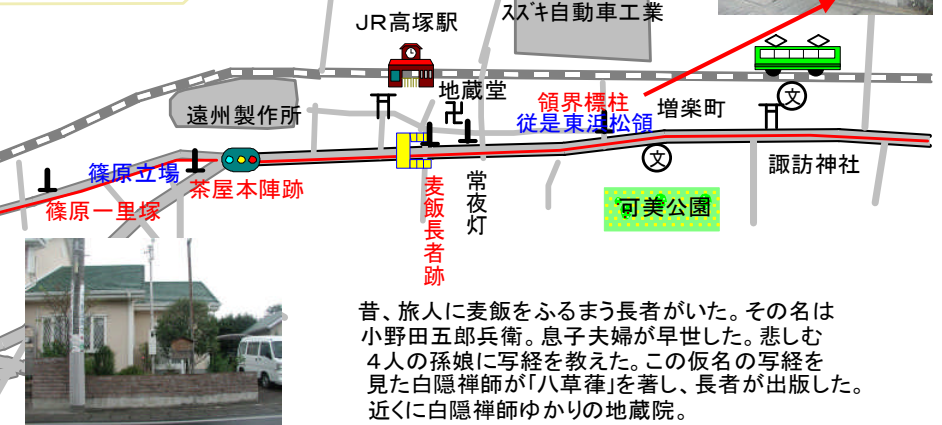
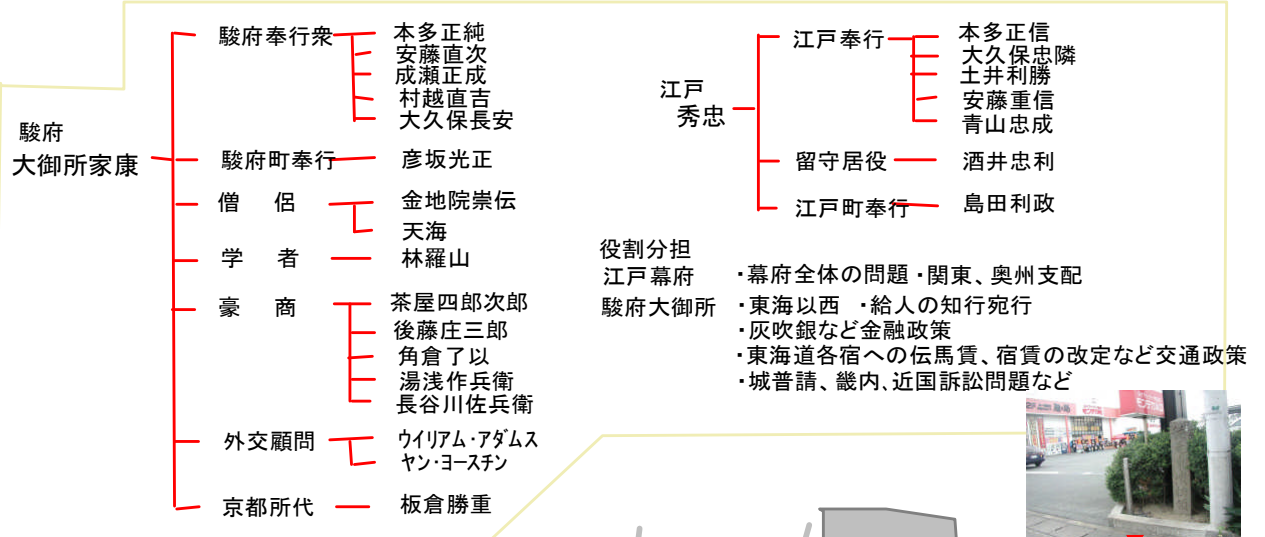


史蹟引佐山大慈悲院の碑が建つかつて走朝作、1尺2寸5分の観世音を祀る由緒ある寺であったが今、廃寺。



一休み

大御所政治の組織と役割 慶長10年代後半



昔、旅人に麦飯をふるまう長者がいた。その名は小野田五郎兵衛。息子夫婦が早世した。悲しむ4人の孫娘に写経を教えた。この仮名の写経を見た白隠禅師が「八草葎」を著し、長者が出版した。近くに白隠禅師ゆかりの地蔵院。



舞阪松並

[弥次・喜多]浜松宿
 泊まった宿で呼んだあんまから宿の女房が幽霊に取り付かれていると聞き怖くて便所行けず、庭で用をたそうと戸を開けると庭に干してある襦袢を幽霊と思い喜多さん気絶。
 ”ゆうれいとおもひの外にせんたくのじゆばんののりがこわくおぼへた”